

「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック2008」表彰式開催

財団法人日本地域開発センターでは、去る3月19日、東海大学校友会館（東京都千代田区霞が関）において「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック2008」表彰式を開催した。本事業は今年度が2回目となり、受章者をはじめ100名を超える方々にご出席いただいた。



式次第（敬称略）

主催者挨拶 伊藤 滋（財団法人日本地域開発センター会長、ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック審査委員会委員長、早稲田大学特命教授）
来賓ご挨拶 渡邊 宏（経済産業省製造産業局住宅産業建材課長）
結果発表及び表彰賞状授与
委員講評
1. 選考理由と総括 坂本 雄三（審査委員会副委員長、東京大学大学院教授）
2. 委員講評 阿曾 香（審査委員、株式会社リクルート住宅総研主任研究員）
田原 祐子（審査委員、株式会社ベーシック取締役社長）
大賞受賞者ご挨拶 株式会社サンワホーム
パナホーム株式会社
ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック2009のスケジュール 事務局

◇表彰式概要

表彰式は主催者挨拶で始まり、ご来賓からご挨拶をいただいた。

経済産業省の渡邊宏氏からは、本表彰制度について、「経済情勢が大変厳しい中で、政府としても集中的な成長戦略をどういふ分野で伸ばしていくかということについて、国土交通省をはじめ各省庁と議論している。その中の一番の柱が低炭素であり、このハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリックは、まさに低炭素化社会に向けた新しい需要惹起の柱になるものではないか」とのコメントをいただ



大賞受賞者への表彰状授与（左：株式会社サンワホーム、右：パナホーム株式会社）

いた。

選考結果の発表と、大賞ならびに特別賞、優秀賞、地域賞の各賞受賞者に対して、伊藤委員長から表彰状の授与が行われた。

続いて、審査副委員長より講評をいただいた。



坂本副委員長

◇選考理由と総括（坂本雄三副委員長）

1. 4つの選定の視点のうち、特に視点1の「外皮と設備の省エネルギー性能値（省エネ指数（Eco）」が最も重要である点は変わらないが、今年は、視点4の省エネ住宅の普及に関わる取り組み（コストパフォーマンス、供給実績、普及のための努力等）として、特に供給実績を併せて評価した。
2. 昨年は、スタートの年でもあり、ヒートポンプの普及の観点から、慎重を期し寒冷地を対象から外したが、今年はその枠を取り払ってオールジャパンとした。I・II地域（北海道、北東北）においては応募がみられたが、VIでの沖縄の申請はなかった。
3. 省エネ指数（Eco）の評価では、大賞のサンワホームがトップであった。パナホームは、省エネ指数が少し低いものの、審査委員会では視点1に加え、他の視点を横並びに評価し、特に視点4の供給戸数が突出していることを評価して大賞とした。
4. 今年1月に改正省エネ基準の告知が出された。ここでは、低炭素化社会を実現するためには、住宅においても、「外皮と設備の省エネ性能の総合的な評価」という考え方が基本になる。ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリックの評価のやり方と同じ考え方で省エネ性を評価することが国の基準に盛り込まれたといえる。

〈選定の視点〉

視点1：外皮・設備の省エネルギー性能値

- ・定められた条件の下で、暖冷房、給湯・換気用エネルギー消費量を算定し、省エネルギー性能値を評価
- *視点1は評価に際し、基本・重点事項となります。

視点2：トータル性能向上に向けての独自の工夫、先進性（数値で表現できない取組み等）

- ・設備・躯体設計等への工夫
- ・空間設計の工夫
- ・住まい方への提案（販売時、居住時）等

視点3：他の性能と省エネルギー性とのバランス・連携 等

- ・快適性、安全性、耐久性、利便性、品質保証等とのバランス・連携 等

視点4：応募した省エネ住宅の普及に関わる取組み

- ・コストパフォーマンス
- ・供給量実績（供給数、シェア等）
- ・その他普及努力 等

委員講評の後、受賞者を代表して大賞受賞の2社からご挨拶をいただき、最後に事務局から「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック2009」のスケジュールが発表され、閉会となった。